令和7年度　西東京市立東伏見小学校　学校評価報告書

学校教育目標　互いの人格を尊重し、自主・自立の精神と豊かな人間性を培い、知・徳・体の調和をとりながら生涯にわたって自己実現を目指す自立した児童の育成を図る。
○心もからだも健康な子ども　○よく考え実行する子ども（重点目標）　○なかよくはげましあう子ども

目指す学校像（ビジョン）　「一人一人のよさが生き、共に学び高め合っていく学校」
【目指す学校像】　○児童が安心して伸び伸びと自分の力を発揮できる学校 ○かかわりを大切に「確かな学力」「豊かな心」「たくましい体」をはぐくむ学校
○一人一人を大切にし、個々の課題解決を支援する学校（特別支援教育の充実）○保護者・地域と手を取り合い、安全安心な環境を創り出す学校
【目指す児童・生徒像】　○「ふれあい」「しんせつ」「みとめあい」を大切にする児童　○「なりたい自分」の実現に向け、主体的に学び、元気に遊び、夢をもつ児童　○学校や地域のよさに気付き、感謝と誇りをもって共に歩む児童
【目指す教師像】　○魅力ある授業・夢中になれる授業を創る教師　○常に児童の心に寄り添い、児童のよさや不安に気付く眼をもち、褒めて伸ばし、みんなで守る、温かい教師　○学校経営方針を理解し、その実現に向けてPDCAサイクルを活性化させ、チャレンジし続ける教師

前年度までの学校経営上の成果と課題
○ふるさと探究学習について、全学年で下野谷遺跡に関わる学習をするとともに、新たに2年生の野菜づくり、3年生の石神井川の学習、4年生の藍染め学習等で地域の方と交流する活動に取り組むことができた。
○いじめ防止に向けて、代表委員会主催の標語づくりを行うなどして、子ども一人一人の意識高揚に努めた。
○毎月1回以上、食育指導を実施したり、地元野菜を給食の食材に取り入れたりして、食育環境の充実を図った活動に取り組むことができた。
△全ての学年が地域の人材・教材と関われるように、特色ある教育担当中心に活動の充実を進める必要がある。

	具体的方策	第1回評価	課題と対策	第2回評価	学校関係者評価	課題と次年度以降の対策
確かな学力の育成	・「東京ベーシックドリル」「くじらタイム」「学習スタンダード」「読書旬間」の活用による基礎学力の定着 ・授業改善プランの推進と「家庭学習の手引き」「チャレンジ家庭学習」を活用した家庭との連携 ・週ごとの指導計画への◎タマークの位置付け（週3日以上）と積極的活用 ・情報の収集、整理・分析、表現の活用と、自由進度に基づく学習活動の推進（学期1回以上）	4	○ベーシックドリル診断の分析結果を活かし、児童自らが苦手な内容を自主的に学習していけるような学校としての仕組みが必要。 →5年生で個票とタブレットを用いた学習方法を先行的に実施。今後の2部会で効果を検討していく。 ○使える各アプリやソフトを積極的に導入する。 →「ミライシード」の導入を待つ。	4	タブレットは調べ学習や個別学習で効率的に活用できるなど、良い点も多いが、ルールを守れないと学習以外が気になってしまうことになる。使い方に注意が必要だと感じる。	○ベーシック診断の分析結果を個別最適な学びに生かしていくようにする。グラフ化した学年の状況を教職員が把握し、国・都・市の状況と比べ、本校が目標に達成できているかの検証も必要。個票を活用し、児童自らが苦手な内容を自主的に学習していけるようにする。 ○ミライシードを積極的に活用し、個別最適な学び・協働的な学びが深まるようにしていく。
	・学んだことを基に、自己との関わりや自らの生き方、社会の在り方について考える活動の充実 ・日々のめあて・振り返りの徹底と、すすんで問題を見いだし解決に向けて追究する学習の充実 ・地域の人材・教材を活用した「ふるさと探究学習」の推進と伴走者としての学習支援の充実	4	○授業でのめあてと振り返りの実施を徹底するよう意識したことで、学習意欲が高まった。単元の終末に自分事として生かせるとよい。 →自分事として生かす授業を取り入れる。（社会科、生活科、家庭科等）	4		○今年研究で「ウェルビーイング」を扱うことができてよかった。よい機会だった。 ○6月の全国社会科教育研究協議会での授業公開を通じて、ウェルビーイングを重視した授業づくりについて研鑽を深めることができた。
豊かな心の育成	・毎週の「特別の教科道徳」の授業における振り返りのカードやノートの充実 ・子ども・保護者から信頼される、人権尊重を基盤とした「西東京あったか先生」の充実 ・「なかよし活動」や挨拶の啓発活動、出前授業や交流活動を通した関わる活動の充実	4	○仲良し活動の内容を充実させる。 →来年度に向けて検討する。 （毎月ある仲良し活動のうちの1回を、遊びではなく給食・掃除にするなど）	4	ヤングケアラー等の対応をしっかりとし、子どもからのSOSのサインを見逃さないようにしていきましょう。	○知らない先生や来校者の方には、自分からすすんで挨拶することを、各学級で指導していく。 ○あったか先生の研修が毎月1回行われ、服務上重要なポイントを確認することができた。
	・ふれあい月間での心を育てる取組と児童会のいじめ防止啓発活動の充実 ・特別支援教室教員を校内委員会等に活用し、個の課題に応じた指導・支援の充実 ・児童の実態に応じた特別支援教室の運営と指導の充実	4	○多様性を認め合うこと・いじめ防止に向けて →SC、SSWなどの来校がある日は職員室の黒板に掲示する。 ○特別支援教室の拠点校として →毎年、1・4年生に向けて、そよかぜの先生から特別支援について児童向けの話をしていただく。	4		○そよかぜ担任から、児童に対する特別支援学級（通級）への理解教育（年1回の授業など）を実施する。 ○ふれあい月間アンケートでヤングケアラーの調査を行い、相談してきた児童の話を詳しく聞き取り、関係機関につなげることができた。
健康と体力の育成	・体力調査の課題克服を通じた体育の導入の工夫と、魅力ある体育授業の推進 ・「サニーマンデー」と「ロング昼休み」の継続的実施と、年3回の一校一取組運動の充実	4	○体力調査結果の活用および一校一取組運動の取り組みとして →2学期以降、サニーマンデーの前半15分に体力テストの結果をもとにした運動にクラスで取り組む。（後半の15分は自由遊び。）	4	子どもだけでなく、教員も一緒に休み時間に校庭で汗をかいて遊ぶ姿は本当に感心します。	○体力調査の結果を元にして、全校で課題となっている項目（長座体前屈などの柔軟性）に関して体育やサニーマンデーの時間にそれを補う運動に取り組むようにした。来年度も継続する。 ○サニーマンデーやロング昼休みに、児童が外でよく遊んでいる。
	・健康教室等を通じた保健指導の充実と、生活振り返り週間等を通じた生活リズムの確立 ・給食放送や食育集会の実施、「給食だより」の工夫、給食食材の地産地消の推進	4	○食育指導の充実として →栄養士が必要に応じて指導する。	4		○栄養士が行う食育集会を通じて、食に関する知識や理解を深めることができた。年度始めに、給食の異物混入を防ぐためにも、給食時のルールやマナーを伝える。 ○養護教諭が直接学級で保健の授業をするなど、健康教室等を通じた保健指導の充実を図ることができた。
地域に開く学校	・下野谷遺跡を活用した「ふるさと」意識、郷土の戦争遺産を基盤とした平和意識の醸成 ・ホームページの更新や「すてーる」の配信と、児童・保護者のアンケートの活用	4	○すてーるの有効的な使い方を考える。 →「8時半までに担任等がチェックをする。それ以降の連絡は電話でしてもらう。」というルールを保護者に学校だよりやすてーるを通じて周知する。	4	地域や家庭と連携した学びの場が広がることは、とても良いことだと思います。 可能な限り協力したいが事前の告知・相談があると助かります。特別授業に関しては、一度関係者で協議会があるとよいと思います。	○「ふるさと主任」が今年度中に地域の連絡先一覧表を作成し、それを次年度以降に引き継いでいくことでスムーズな連絡ができるようにする。 ○「したのや縄文の里・秋まつり」や「下野谷遺跡国史跡指定10周年記念シンポジウム」に5年生が参加した。地域の方や地域学習推進課などと連携して取り組むことができた。
	・年5回の学校運営協議会の充実と、地域学校協働活動による協働体制の確立 ・PTA・青少年育成会・「おやくじらの会」・避難所運営協議会等の関係団体との連携	4	○定期的に学校運営協議会が開催され、委員の皆様からご意見をいただいたり、教職員と交流したりすることで関係を深めることができた。	4		○PTA・青少年育成会・「おやくじらの会」・避難場運営協議会等の関係団体と更に連携を強化できるようにしていく。 ○学校運営協議会での教職員との交流や、地域学校協働活動での野菜づくり・町探検のサポートなどを通じて連携が深まった。
業務改善を通じた学校力の強化	・企画会議の充実による職員会議の短縮 ・月ごとの勤務時間の見える化による業務の見直し活動 ・校務支援システムの活用による情報共有と業務の効率化	3	○職員会議の回数は減ったが、企画会議の時間が長すぎるようになった。 →共通理解できるところは事前に行う等、工夫する。 →校務支援システムのお知らせやメールを頻繁に活用するようにし、会議録等の情報の共有漏れを防ぐ。	3	時間外労働時間は少しずつ減ってきているので、業務内容についてももう少し精査していけるとよいと感じます。	○教職員の時間外労働時間は、昨年度に比べ-3%以上達成している。 ○昨年度に比べ、会議の精選がなされ、職員会議の回数自体は減った。会議録の電子化、職員が必ず目を通す習慣にすることで会議時間を減らすようにする。 ○「あったか先生」という分かりやすいネーミングがあり、また普段の服務事故防止研修もあって、よくできている。
	・「あったか先生チェックシート」を活用した月1回の点検 ・職員夕会や校務支援システムの「お知らせ」機能等を活用した服務事故防止研修の実施 ・机フラット化を中心とした職場環境の改善	4	○あったか先生を適切に推進する。 →あったか先生、あったか職員室について全体で話合い、捉え方の見直しをする。	4		○人権意識については全教職員がしっかりできている。 ○「あったカフェ」については、若手教員が孤立しないように今後コミュニケーションをとる場として活用する。持ち寄りの話題や悩み事を話す場にしたい。 ○校務支援のお知らせやメールの活用で連絡漏れが減った。